

修報十二号によせて

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所 長

田 久 孝 翁

「経世済民」

これこそ大学が果たすべく使命である。建学の精神である義を行い以て其の道に達す。義の伴わない行為は如何に高邁なる理想と云えども、その目的を達することは出来ないというように、世を起こすことも民を救うなど出来ることではない。

論語に示される通り、教育そのものの価値判断はこれによって明白であるように、大学が果たすべき役割というものは、自ずから明白である。平和経済学、戦争経済学か世界は今迷っている。これを一口に言って「経世済民」である。大学の使命であるというのは文学（教育）によってのみ人々の心は大きく変わっていくのであり、有教無類の精神が大学の使命というものであり、そこに心の教育というものが存在する。即ち建学の精神である。

最近に至る所で心の教育という問題が大きな社会問題として叫ばれているが、学問の始まりが心の問題として取り上げられる。

「有教無類」

教え有りて類い無し、生まれたままの人間は誰でも平等であり、能力に大差はなく、全ては教育によってのみ人々の心は大きく変わっていくものであると言われるように、教育がすべてであるというのが有教無類の精神である。

このようにして教育が如何に大事であるか、科学兵器であれ、医療技術薬学であれ、人間が必要とされる機械器具全てはそこから生み出されるものであり、文明開花の出発点となっている。それが昨今の教育ではないだろうか。

「修身齐家」

身を修め家を斉える、それが世の為人の為、心の教育とはここから始まる。建学の精神も自らを正し、人の世を正す。それが教育本来の姿である。心があるからこそ万物の霊長であるのであって、心そこにあらざれば只の動物でしかない。昨今の世相に代表される言葉に、人の尊き所以は外物に存ずるにあらずして己の心にあることを思うべしとあるように、全てが心の教育を物語るものであり、建学の精神が至る所に要求されている。昌平黌の歴史と建学の精神について、再度申し上げ修報十二号に寄せての挨拶と致します。